

ドイツ民主共和国の時代におけるライプツィヒ聖トーマス教会合唱団の日本公演

大沼 薫 (ハンブルク大学)

本発表では、ドイツ民主共和国 (以下東ドイツと表記) (1949-1990) の時代におけるライプツィヒ聖トーマス教会合唱団 (以下同合唱団と表記) (1212-) の日本公演 (1975、1977、1985 年) に着目し、同合唱団の国外演奏旅行の枠組みにおける日本公演の位置づけと同合唱団の役割について、主にライプツィヒ市立歴史博物館と日本の国立国会図書館に残る史料の調査に基づいて考察することを目的とする。

ライプツィヒにある聖トーマス教会での歌唱を中心任務としてきた同合唱団は、1920 年より国外演奏旅行を通して活動範囲を格段に広げ、国際的な名声を得ることとなった。1949 年以降、社会情勢の影響を受け、規模と旅行地の拡大や縮小はみられるが、東西ドイツ統一の 90 年まで活動が中断することはなかった。

他の公演と比較すると、日本公演で注目すべき点は、異例の演目構成であったことだ。例えば、77 年 9 月の公演では、J.S. バッハ (1685-1750) の《マイ受難曲》BWV244 を 9 回、《ヨハネ受難曲》BWV245 を 2 回、《クリスマスオラトリオ》BWV248 を 1 回演奏した。これは同合唱団を招聘した総合文化社 (1972-1977) の要望によるものであったが、当時の国外公演ではモテットやカンタータしか演奏しないのが普通であった。75 年、85 年も 77 年と同様の傾向がみられる。教会暦は考慮されず、バッハの音楽がコンサートとして解釈されている点については、トーマスカントールであった H.J. ロッチュ (1929-2013) も言及している。というのも、当時、上記 3 曲は教会暦に沿って聖トーマス教会で演奏することが同合唱団の慣習であったためである。

当時の東ドイツと日本の新聞記事より、同合唱団の受け止められ方や課されていた役割が読み取れ、ロッチュはそれらを理解したうえで公演に臨んでいたことがわかる。日本のメディアが評したように、本場の音楽を奏でるバッハの合唱団であったと同時に、政治的側面からみれば、二国間の文化交流を促進し友好関係を強化する大使的存在でもあったのである。